

ソウルオリンピックが開催される2年前、1986年の6月29日、私は初めての韓国への旅に出た。たった一人で。

とはいえ、日本の旅行社を通じて韓国の旅行社に、通訳兼案内をつけて貰うように手配していた。実は、家根祥多氏（当時、京都大学大学院）から韓国へ調査旅行に行くので一緒に、との誘いを受けた。近い内に行きたいと考えていたので、ちょうど良い機会だとすぐに「その気になった」。

しかし、当の彼はドイツへの留学が決まり、急遽キャンセル。「その気になった」私は、すでに気持ちの変更が効かなかった。当時の韓国の物価は、通訳兼案内を一人つけたとしても、日本国内での一人旅に相当する経費で旅行ができた。もちろん、宿泊は最高級ホテルで。

宮崎から福岡空港へ、福岡空港から当時は金浦空港へ。機内食の慌ただしい「摂取」に気を取られているあいだに、あつげなく大陸の一角・半島の大地に降り立っていた。そして、韓国語の勉強や、旅程の十分な下調べなども、何の準備をする間もなく旅立った独りぼっちの旅人は、同じ顔をした、しかし確実に異国の喧せ返るような雑踏の中に、いわば唐突に投げ込まれ、ただただ孤独だった。

しかし、それは、ほんのしばらくの間のことだった。不安を胸に、出迎えの人々の群れを見渡し、その中に「彼女」を見付け出した時、この旅がこの上もなく楽しく、充実したものになることは、約束された。一人で、ひとりで来て、良かった。

韓国内の主要な考古学関係の博物館、大学校博物館と各地の遺跡を回りたい、こちらから出したリクエストはそれだけだった。それを受け取った韓国の旅行社は、直ぐにこのまだ見ぬ旅行者を思い描いた。考古学からの連想、おそらく年配の、あるいは初老と言っても良いかも知れない人物像を。そして、ためらいもなく旅行社で最も若い29歳の独身女性を、通訳兼案内として抜擢したのだ。

そのように、二人だけの1週間の旅が始まった。彼女の名前は、辛承姫。西谷正先生（当時、九州大学教授）から10数枚の名刺に紹介文を書いていただき、それだけを頼りに韓国国内を擲掛け状に訪ね回った。

到着したその足で、まず、ソウルの国立中央博物館へ。旧朝鮮総督府の建物に移転拡張する準備中で、公式には休館中であつたが、西谷先生の名刺の効果は確実だった。展示の途中ではあつたが、おそらくその新しい中央博物館を最も早く見学した日本人となった。

時代は変遷する。「日帝時代」の象徴であつたその建物も、10年後の1996年、完全に撤去され、さらに2005年10月には東洋一の規模を誇る新しい中央博物館が竜山に誕生する。そして、町の景観も大きく変わった。今、郊外に建ち並ぶ高層マンションが醸し出す独特の景観も、最も大きく変わったものの一つである。

中央博の後には、景福宮を巡り、敷地内の国立文化財研究所を訪問した。この研究所もつい先頃（2004年）、大田の郊外の新しい場所へと移転している。

そして、ソウルの夜の町へ。宿泊したタワーホテルから坂道を下ると国立劇場がある。朴正熙大統領の暗殺未遂事件（夫人は死亡）のあつたあの劇場だと聞き、現代史の一齣が迫ってくる。当時、現実的にはまだ軍事政権下であり、そうした緊張感は町の中にも、道路の上にも確実に存在した。それでも、最初の夜のピビンパブは平和で、美味しかった。食後は、明洞の喫茶店に入り、韓国の音楽に聴き入った。

翌日は、公州から百済の都・扶余への旅である。これも幸い、博物館は休館の月曜日であつたが、前日に中央博で偶然居合わせた国立扶余博物館の申光燮先生に迎えていただいた。その時には、2004年秋の日韓交流展「それでも騎馬文化はやってきた」で、中央博の遺物管理部長としてお世話をいただくことになるとは考えてもみなかった。

公州の整備された武寧王陵の前の食堂で、黒い味噌のかかったゴムのように弾力のある麺を食した。それがチャジャン麺の初体験である。また、独特な堅穴住居跡の標識遺跡として知られる松菊里遺跡へは、往復何時間で幾ら、との交渉でタクシーをチャーター、その安さとそのシステムは、今も変わらない。これでもかと、安くで遠くまでタクシーに乗れる。色々な異文化が次から次に、心地よい刺激を与え続けてくれる。

未舗装の道を歩き、川縁に着く。川風を受けながら、遊覧船の揺れは、時の流れと一体となる。百済滅亡の舞台、扶蘇山城に登る。頂に立ち、その時急に、望楼へと舞い上がる川からの風。少し息を切らした彼女の横顔に、黒髪がかかる。落花岩からチョゴリを翻し、白馬江に身を投げた美しい宮女の姿が、そこに甦る。

翌日、扶余から引き返す形で、午前中に国立公州博物館を訪れ、大田からは、にわか韓国語の講義を受けながら、セマウル号で東大邱へ。セマウル号の乗り心地は好きだった。まず、啓明大学校博物館を訪れる。ちょうど昼食時となり、金鐘徹先生からはじめての韓定食をご馳走になる。ずらりと並ぶ小皿の量が驚き、その食文化は、やはりカルチャー・ショックであった。

昼食後は、調査が終了し整備に取りかかったばかりの大加耶の中心・池山洞古墳群に連れて行っていただいた。ソウルオリンピックに向けて急速に整備される高速道路、しかしアスファルトではなくコンクリート舗装のため車の振動が激しいことを嘆かれていた金先生を記憶している。その後、嶺南大学校博物館へ。

夜、彼女と書店へ散歩。「大邱書籍」、そこで金元龍先生の『韓国考古学概説』を購入した。それが、購入した最初のハングル文字の書籍であった。

翌日、大邱から慶州へは高速バスで。今もそうであるが、バスは主要な交通手段として機能している。そして4日目、5日目はじっくりと新羅の都・慶州に腰を据えた。まさに「屋根のない博物館」と言われるに相応しい町である。国立慶州博物館をはじめ、古墳公園、瞻星台、石窟庵、仏国寺など2日間でも足りない。

夕方、彼女は、従兄弟夫婦が住んでいるからと言い、彼らの家に招待してくれた。おかげで一般家庭のオンドル部屋を初体験できた。

6日目は、釜山へ移動、釜山大学校博物館を訪れた。展示室で遺物を観察していると、何時の間にか周りを学生達に取り囲まれていた。言葉は不勉強であったが、何やら私に関することを囁き合っていると感じた。後で彼女に聞いてみた。「日本は景気が良いから、こうして豊かな旅行が出来るのだ」といった趣旨のことだったらしい。韓国の国情に根ざした若者達の発言だったのであろうが、確かに当時は、そうかも知れなかった。しかし、今元気がよいのは韓国の方だと思う。

最後の夜、港に添って建ち並ぶ鮮魚店の2階で食べた刺身は、新鮮な感動で刺身を美味しいと感じさせるものだった。日本式のわさび醤油より、ニンニクやコチュウジャン（韓国味噌）で食べる食べ方が好みに合ったのだ。

最終日は、午前中に釜山市立博物館を見学。そして、午後3時過ぎの便で帰国する。

タクシーが、金海空港へのトンネルに吸い込まれていく。薄暗いオレンジ色の照明の中で、彼女がそっと手を重ねてくる。トンネルの出口が目映い。

(北郷泰道)